

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20791740  
 研究課題名（和文） 注意欠陥多動性障害児の母親におけるマターナルアタッチメント形成プロセスのモデル化  
 研究課題名（英文） The formation process of the Maternal Attachment in mothers of children with Attention-Deficit Hyperactivity Disorder.  
 研究代表者  
 真野 祥子（MANO SHOKO）  
 愛媛県立医療技術大学・保健科学部看護学科・助教  
 研究者番号：90347625

## 研究成果の概要（和文）：

学童期の注意欠陥多動性障害（ADHD）児を持つ母親におけるマターナルアタッチメント形成プロセスの特徴について検討した。12人の母親に半構造化面接を実施し、子どもの行動と養育について母親自身の情動体験を含めて聞き取りを行った。問題行動に直面するとネガティブな感情が生じ養育態度も厳格になりがちであったが、その一方で可愛いと思える様子の時にはポジティブな気持ちとなっていたように、アンビバレントな状態が特徴的であった。マターナルアタッチメントの状態は、学校生活が開始されると悪化していたが、診断後は問題行動の認識の仕方や養育態度に変化が見られ、良好な状態を示すようになった。

## 研究成果の概要（英文）：

The present research aimed to elucidate the developmental processes of maternal attachment in mothers of elementary school children with attention deficit hyperactivity disorder (ADHD). Semi-structured interviews were conducted on 12 mothers of children with ADHD. During interviews, mothers were asked about their parenting, their children's behavior, and their emotional experiences. Mothers experienced negative emotions and applied strict disciplinary practices in response to problem behaviors, whereas they felt positive emotions toward children when the children acted obedient or cute. These results indicated that mothers had ambivalent feelings toward children. Maternal attachment was most critical after children start elementary school because of increasing difficulties related to problem behavior. However, following the diagnosis of ADHD, the recognition of problem behaviors and parenting skills improved, thus enhancing maternal attachment. Because mothers could understand the cause of the problem behaviors, they studied methods for coping with the children's problem behaviors.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：注意欠陥多動性障害、マターナルアタッチメント、情動、半構造化面接

### 1. 研究開始当初の背景

ADHD 児の母親は、子どもの問題行動を制止しようと厳しくしつけようとする。この抑圧的な養育態度の積み重ねが親子関係、児の二次障害の悪化を招き、更に悪循環が生じる(田中,1995)。

申請者の研究から、ADHD 児の母親は、健常児の母親と比較して育児ストレスが有意に高く、児の行動特徴が顕著なほど、子どもに対する愛着(Maternal Attachment:以下、MA と略)が減少し、その結果、否定的で厳格な養育態度となることが示唆されている。ADHD 児の母親の養育態度が厳格となる背景に、子どもとの相互作用を通して MA 形成が妨げられていることが疑われる。MA の問題は、虐待との関連が指摘されているが、実際、ADHD 児は虐待を受けるリスクが高い。母子の不応答行動を未然に防ぐためにも、健全な親子関係を築くことができるよう支援する必要がある。

そこで、児の成長に伴い、どのようなプロセスを経て MA が形成されてきたのかを明らかにし、その結果をもとに効果的な援助方法を確立する必要がある。

### 2. 研究の目的

- (1) ADHD 児を持つ母親の MA について、児の成長に伴い、どのようなプロセスを経て形成されてきたのか、質的な特徴を面接法で明らかにする。
- (2) 申請者のこれまでの研究結果と今回のデータを統合し、ADHD 児の母親における MA 形成プロセスをモデル化する。
- (3) 作成された MA 形成プロセスのモデルを基に、MA 形成促進のための援助のあり方について検討する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象

学童期の ADHD 児を持つ母親 12 名を対象に、半構造化面接を用い、児の行動と養育について、母親の情動体験を含め聞き取りを行った。

#### (2) 分析

MA には行動的側面と意識的側面があり、行動的側面は行動観察、意識的側面は面接や質問紙を用いて測定される(菅原, 1989)。意識的側面は「我が子が自分の人生の中で重要な位置を占めていると感じる程度」であり、愛や暖かい感情、所有・献身・保護の気持ち、

接触が長引くことへの期待、世話をすることの喜びの要素で評価される (Brockington, 1988)。

子育てには喜びや怒りなどの側面が多く含まれていることから、養育は情動体験(emotional experience)であると言われていいる。育児の中で親が用いる方略決定において、親自身の情動体験が大きな影響を及ぼす(Dix, 1991)。例えば、親のポジティブな情動体験は応答性のよい暖かい養育を促進し、ネガティブなものは虐待的な養育をもたらす。これらをふまえ、母親の情動表出の経時的変化を MA の視点から考察する。

#### i. 逐語録の分析

面接内容を逐語化し、子どもの行動に影響された出来事、母子の相互作用場面、母親・周囲の反応に着目してエピソードにまとめた。各エピソードを「子どもの行動」「周囲からの対応」「母親の情動体験」「母親の行動」の4カテゴリーに分類し、時間的経過に沿って一覧表に示した。さらに各事例のエピソードの意味内容の類似性と相違性を比較検討し特徴的な内容を抽出した。

#### ii. MA 形成プロセスのモデル化

母親の情動に焦点をあて、子どもの行動特徴が MA へ及ぼす影響について検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 育児における母親の情動表出の経時的変化とその影響要因

##### i. 乳幼児期

全対象者が2、3歳頃から『ADHD の特徴による育てにくさ』を感じ、問題行動に直面した時、子どもに対して否定的な気持ちを抱き体罰を用いることもあった。

##### ii. 小学校入学後

入学後に診断された子どもの母親 10 名は、トラブルが多発し始めたことを語った。そのうち 8 名が『教師、保護者からの批判』を受けていた。母親はその批判を受け、原因が分からず子どもに対して嫌悪感を抱き、きつく叱っていた。一方、『学校(教師)の理解・支援』が得られた場合、母親の気分は安定していた。また、『夫との良好な関係性/夫からの支援』がない場合も母親は苦痛を感じていた。一方、子どもの望ましい行動に対しては可愛いと感じていた。

### iii. 診断

診断を受けた時の気持ちは概ね2つに分けられた。1つは、「ほっとしたんです。」と、6名は安堵していた。一方、5名はショックも感じたが、理解できなかった子どもの行動が理解でき、対策が立てられることに意義を見出していた。

### iv. 診断後

診断後は全員の母親が本を読んだり親の会に参加し、疾患や対処法を理解しようとしていた。『疾患についての知識』を得ることで問題行動に直面した時は、子どもの行動の見方と対応が変化し、子どもとの関係性も改善が見られた。

『ピアサポート』の効果について、気持ちと子どもに対する態度が変化していた。診察した医師について、『医師からの具体的な対応策や暖かい言葉』は母親を支え、育児に対する動機付けを高めていた。

#### (2) 子どもへのアンビバレントな態度

「生まれ変わったらママは子どもも産みません。(中略)二度とこんな目にはあいたくありませんって子どもに言ってるんです」と語る一方で、「(子どもの行動は)今はとってもプリティで。子どもに救われることは多い」とも語られた。子どもに対するアンビバレントな態度が伺えた。

#### (3) ADHD 児を持つ母親の情動体験と MA

母親の情動表出の経時的変化を MA の視点から考察する。

乳幼児期、母親は『ADHD の特徴による育てにくさ』のせいで困ることが多く、MA の指標である児に対する暖かい気持ち、保護・接近したい気持ちに欠けるようになる。

小学校入学を境に、問題行動に関連するトラブルが多発し、母親は『教師、保護者からの批判』を受けその対処を求められ、さらに MA の状態は低下する。周囲からの批判はさらに MA の状態を低下させることが考えられる。この時、『学校(教師)の理解・支援』『夫との良好な関係性/夫からのサポート』が得られない場合は低下の度合いが大きくなるが、得られると低下を防ぐことができる。

診断を契機とし、母親は『疾患についての知識』『ピアサポート』『医師からの具体的な対応策や暖かい言葉』を得ることで、問題行動の原因、対処法が明確となり、児の行動や夫に対する認識の仕方も変化する。これらは MA の維持要因として働くと考えられる。

#### (4) ADHD 児を持つ母親の支援のあり方

特に学童の母親の場合、周囲からの批判によって疲弊してしまっていることが想像で

きる。よって母親の大変さに理解を示し、母親が困難を感じていることに対する具体的な対応策や暖かい言葉をかけ、正しい疾患の知識を伝え、親同士が支えあえる場を紹介することが重要である。そして、周囲から受ける批判自体への対処も重要である。母子と学校や保護者との関係性を査定し、緊張した関係にある場合は援助者が仲介するなどの対策を講じなければならない。父親からサポートを得られる場合は積極的な活用が大切である。

#### 5. 主な発表論文

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 眞野祥子、堀内史枝、宇野宏幸. 注意欠陥/多動性障害児の行動特徴と母親から子どもへの情動表出について—診断後の半構造化面接による検討—. 小児保健研究、査読有、68 (1)、28-38、2009.

[学会発表] (計 2 件)

- ① 眞野祥子、宇野宏幸、堀内史枝: 注意欠陥/多動性障害児の母親におけるマターナルアタッチメントの形成プロセスについて、平 20 年 5/28~31、第 50 回小児神経学会総会(東京)
- ② 眞野祥子、宇野宏幸、山下裕史朗、松石豊次郎、注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) 児を対象としたサマー・トリートメント・プログラムが母親の対児感情に及ぼす効果、平 21 年 10/29~30、第 56 回日本小児保健学会(大阪市)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

真野 祥子 (MANO SHOKO)  
愛媛県立医療技術大学・保健科学部看護学  
科・助教  
研究者番号：90347625

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：